

第151回 花のお江戸を歩く会

文学と歴史の桜並木を歩く

「市川文学の道～弘法寺～国分寺～里見公園」

2013年3月23(土)

迷子になったら⇒09085831528(管理人携帯)

＜散歩道のご案内＞

400年以上の樹齢を超える伏姫桜の美しさは見事です。名利弘法寺から里見公園に連なる市川桜を堪能しましょう！

関東の桜の名所として有名な千葉縣市川市。中でも「市川文学の道桜並木」「弘法寺伏姫桜」「じゅんさい池緑地・里見公園」の花見は見事です。関東一と言えるかも知れません。東京では味わえない伝説と歴史・古墳が織りなす桜街道を楽しく歩きましょう。

＜散歩道の順路＞

JR市川駅北口→市川文学の桜並木→真間川→真間の継橋→手児奈霊堂→弘法寺（伏姫桜・昼食）→亀井院→吉澤ガーデンギャラリー→須和田公園→郭沫若記念館→下総国分寺→庚申塔→国分尼寺→じゅんさい池緑地→里見公園（桜の名所）→里見台第二公園→国府神社→京成「国府台駅」

＜個別説明＞

☆**市川の地名由来**⇒現在の江戸川が当時東国一の川であったことから一の川が訛ったとする説、江戸川の河岸に川舟が集まり定期的に市が開かれていたことに由来するという説の2つが有力である。

① 市川文学の道

市北部の市川、真間、新田、平田、菅野、八幡などは市の木であるクロマツも多く静かなたたずまいであり、これらの地区は、戦前は東京下町の富豪が別荘を構えたり、戦後も敷地の広い邸宅が多い高級住宅地となっている。過去には永井荷風、幸田露伴（次女の幸田文、孫の青木玉も同居）、北原白秋など数多くの文人が好んで住み、市川に関する記述がある作品も多い。これら文人の足跡が、市民団体や市などの手で「市川文学の散歩道」として残されている。クロマツの繁った住宅街の存在や、歴史のある町で古刹が多いこと等から千葉の鎌倉と呼ばれることもある。→真間川

② 真間の継橋

真間の継ぎ橋は、万葉の時代、この地域にたくさんの州があり、その州から州へのかけ橋が継橋だったと考えられています。真間万葉頭彰碑建立の縁となる読み人知らずの歌詞の一部に「真間の継橋やまず通わむ」と詠われています。

☆真間万葉顕彰碑☆

万葉集には真間の手児奈の伝説を詠んだ山部赤人や高橋虫麻呂の歌をはじめ真間の地を歌った10首ほどの歌が載せられています。その歌の中に「われも見つ人にも告げむ葛飾の真間の手児名(奈)が奥津城処」(山部赤人)、「勝鹿の真間の井を見れば立ち平し水汲ましけむ手児奈し思ほゆ」(高橋虫麻呂)、「足の音せず行かむ駒もが葛飾の真間の継橋やまず通わむ」(読み人知らず)の3首があります。それぞれの歌のゆかりの場所に立てられているのが3つの真間万葉顕彰碑です。

③ 手児奈霊堂

身なりはそまつだったが、とても美しい手児奈。多くの男性から結婚を求められたが、「私の心はいくつでも分けることはできます。でも、私の体は一つしかありません。もし、私が誰かのお嫁さんになれば、ほかの人を不幸にしてしまいます。」となやみ、海に行く(当時は真間山の下は海だった)。そのころ、日没になろうとしていた。「そうだ、あの太陽のように。」と思って海に身投げしてしまった。という伝説から手児奈霊神堂が作られた。

④ 弘法寺(くほうじ)

奈良時代、行基が真間の手児奈の霊を供養するために建立した求法寺がはじまりとされる。平安時代、空海が伽藍を構えて弘法寺と改称したという。その後、天台宗に改宗した。鎌倉時代、日蓮の布教を受けて、時の住持・了性法印が法華経寺・富木常忍と問答の末やぶれ、日蓮宗に改宗した。常忍の子で日頂を初代の貫主とした。大檀那の千葉胤貞より寺領の寄進を受ける。室町時代、山下に真間宿または市川両宿といわれる門前町が発展した。徳川家康より朱印地30石を与えられる。江戸時代、徳川光圀が来訪し茶室に遍覧亭という号を贈る。紅葉の名所として知られ、諸書に弘法寺の紅葉狩りのことが記されている。明治時代、火災のため諸堂は焼失した。その後、再建され現在に至る。境内には、日蓮の真刻と伝える大黒天を祀る大黒堂、鐘楼、仁王門、伏姫桜とよばれる枝垂桜があり、小林一茶、水原秋桜子、富安風生などの句碑がある。池上法縁五本山のひとつ

☆涙石☆

正面石段の下から27段目にある石。石段は千個以上の石からなるが、この石だけ涙を流すかのように濡れ続けている。江戸時代に、作事奉行の鈴木長頼が日光東照宮の造営のために使う石材を伊豆から船で運ぶ途中、市川の根本付近にさしかかった時に船が動かなくなり、積んでいた石を勝手に近くの弘法寺の石段に使用してしまった。長頼は幕府から責任を迫られ石段で切腹。その時の無念の血と涙が染み込んでいるという伝承がある。また、市川市には湧水が多く、たまたま石の一部が水脈に触れているのではないかとの説もある。

☆伏姫桜☆

境内には伏姫桜と呼ばれる樹齢400年の見事な枝垂れ桜があります。この伏姫桜は南総里見八犬伝の伏姫にちなんで付けられた名前といわれ、樹齢400年を超えているそうです。それにしても見事な緋垂桜ですね。→手弁当て屋食

⑤ 亀井院

1638年頃、弘法寺の第十一世住職である日立上人が貫主の隠居寺として建てたという。古くは清水が湧いていたことにちなんでか瓶井院、瓶井坊とも呼ばれ、真間山弘法寺の子院のひとつであった。後に弘法寺の大檀那、鈴木長常を葬った際、鈴木院と改称した。江戸時代には、江戸幕府作事奉行鈴木長頼が亀井院を修造したという。鈴木長常の息子である鈴木長頼が1705年に、日光東照宮の石を亀井院の石段に流用したかどで幕府に咎められ切腹した後、当時亀井と呼ばれていた真間の手児奈にちなみ、亀井院と改称した。その後、1916年(大正5年)5月から6月頃まで北原白秋がこの寺の庫裏に住んでいたこともある。

万葉集の一つとして、次のような和歌がある。勝鹿の(かつしかの) 真間の井見れば 立ち平(なら)し 水汲ましけむ(みずくましけん) 手児奈し思ほゆ 高橋虫麻呂(詠)葛飾の真間の井を見れば、水を汲む手児奈を思い出す。亀井とは、井戸に霊亀が出現するという伝説から来ている。境内にある真間の井は、万葉集にも詠まれた真間の手児奈が水を汲んだ井戸と伝えられている。→吉澤ガーデンギャラリー

⑥ 須和田公園

弥生時代後期の須和田遺跡を整備し公園としたもの。発掘調査が行われたときに、5棟の住居跡が発見され、布目瓦や文様瓦、文字を墨書きした土器などが出土しました。園内には中国文学者である郭沫若氏の「須和田」詩碑やバラコーナーなどがあります。桜の名所。

⑦ 郭沫若記念館

中国・四川省樂山市出身の文学者・歴史学者・政治家である郭沫若(かくまつじゃく)氏は、昭和3年から約10年間にわたり、市川市の須和田で家族とともに暮らしました。その後、日本と中国の架け橋となる活躍をし、市川市と樂山市の友好都市締結のきっかけとなりました。この「市川市郭沫若記念館」は、郭沫若氏の旧宅を真間5丁目の当公園に移築・復元し、整備したものです。

⑧ 下総国分寺

天平13年(741)聖武天皇によって発せられた「国分寺建立の詔」により、「金光明四天王護国之寺」として建立されました。下総国分寺跡は、その詔によって建立された下総国分僧寺の跡で、現在の国分寺とほぼ同じ辺りに法隆寺式伽藍配置で建てられていました。昭和40~41年に実施された発掘調査では、現在の本堂下から東西31.5m、南北19mの何層にも土を固めた金堂の基壇が発見され、その基壇の中心から北西40mにあたる現在の墓地内に東西26m、南北18mの講堂の基壇があり、さらに金堂の基壇の中心から西へ39mのところの一辺が18m四方の方形の塔跡の基壇がありました。平成元年~5年の発掘調査では、寺の範囲が東西300m、南北350mほどになることや寺づくりや下働きをしていた人がいた場所などが分かりました。→庚申塔

⑨ 下総国分尼寺跡

国分寺(国分僧寺跡)の北西500mにあり、現在は公園として保存されています。国分尼寺

は国分僧寺と同じように聖武天皇が天平 13 年（741）に発せられた「国分寺建立の詔」により、「法華滅罪之寺」（尼寺の正式名称）として各国々に建立されたものですが、建立の実年代は現在のところはっきりしません。

この地はかつて「昔堂」と呼ばれ、国分僧寺跡と考えられていましたが、昭和 7 年に多くの瓦とともに底部に「尼寺」と墨書された土器が発見され、尼寺跡であることが分かりました。伽藍配置は南北の直線上に講堂を北にして金堂が南にあります。昭和 42 年夏に行われた発掘調査では、東西 25.5m、南北 22.4m の金堂基壇と、東西 27m、南北 19m の講堂基壇が発見されています。また寺域を区画する北・東・南側の溝も確認され、東溝からは黄白色と緑で彩られた二彩の小壺が発掘されています。

⑩ じゅんさい池緑地

国府台と国分の台地間に深く入り込んだ古くからの沼があり、これを国分沼といいましたが、この沼にはじゅん菜がたくさん生えていたことから、じゅん菜池と呼ばれるようになりました。昔は近隣の農家の人々が、じゅん菜を摘んで出荷したこともありましたが、昭和の初期に沼が何度も干上がり、ついにじゅん菜は絶滅してしまいました。戦後、沼は田んぼに変わりましたが、地元の人々から昔のようなじゅん菜池を復元してほしいとの要望を受け、昭和 54 年に現在のじゅん菜池緑地へと整備しました。

⑪ 里見公園(桜の名所)

里見公園は下総台地の西端、江戸川に面した台地上にあり、このあたりは国府台と呼ばれ、ここに下総国府が置かれ、下総国の政治や文化の中心でした。その後、室町時代天文 7(1538)年 10 月、足利義明は里見義堯等を率いて国府台に陣をとり北条氏綱軍と戦いました。しかし北条軍が勝利をおさめ義明は戦死し、房総軍は敗退しました。続いて永禄 7(1564)年正月、里見義堯の子義弘は再度国府台城で北条軍と対戦しましたが、この合戦も北条軍の大勝で終わり、以降この土地は北条氏の支配するところとなりました。

江戸時代に徳川家康が関東を治めると国府台城は江戸俯瞰の地であることから廃城となりました。明治から終戦まで国府台は兵舎の立ち並ぶ軍隊の街として栄えました。昭和 34 年、市川市はこの由緒ある古戦場を記念するために、一般の人々の憩いの場として里見公園を開設しました。→里見台第二公園

⑫ 国府神社

国府台の地名は伝説によると、日本武尊がこの地から武蔵国へ向かおうとしたとき、多くの河川が州をつくって流れているのを見て、軍勢を歩いて渡すことはできないものかと思案していると、コウノトリが飛来して浅瀬を教えてくれたため難なく武蔵国へ渡ることができました。そこで尊は褒美にこの台地をコウノトリに与えました。このことから「鴻之台（こうのだい）」の地名が起こったといえます。国府神社はこの伝説を裏付けるように、祭神が日本武尊で御神体がコウノトリの嘴（くちばし）ということです。

＜お疲れ様でした解散です：お帰りは京成「国府台駅」＞